

首余りの中で、ただ一度だけしか使われなかった単語、先生はそれを〈孤語〉と名づけます。つまり、〈孤語〉とは、当時の日常語ではあっても、上下多数の万葉歌人からは疎外され敬遠されたひとりぼっちのことばです。この〈孤語〉が憶良の「貧窮問答歌」には何種類も見られることを指摘しながら、先生は、そこに憶良のリアリティを発見します。たとえば、〈貧し〉という生活的民衆的な語が憶良の〈孤語〉であり、彼と常に対比される大伴旅人の場合、あの有名な讃酒歌の中の〈醜〉が旅人の孤語であることを注意しつつ、旅人における「リアリティの喪失」と、憶良の「リアリティの発見」を論じます。つまり、憶良にとっては貧富という民衆の現実生活が作歌の対象であったのに対し、旅人には、現実を離れたもっと浪漫的な美醜の世界こそが関心事であったということです。

この「リアリティの喪失と発見」は、Ernst Fischerの「The Necessity of Art」から導かれたものですが、ぼくたちの挑戦を受けて、先生が、「A Marxist Approach」と副題にあるこの本に食いついてゆかれた時のことを、今ではなつかしく思い出します。（リアリズムの問題は、俗流反映論のゆきづまりの状況などもあって、現在、

一つの壁にぶつかっており、FischerやR. Garaudy—「DUN RÉALISME SANS RIVAGES」—たちが、その新しい突破口を切り拓こうとしています。それは、ぼくたちにとっても大きな宿題と言っているでしょう。）

こんどの「高木市之助全集」には、W. Wordsworthの詩跡をたずねた「湖畔」や、詩と酒を縦横に論じた「詩酒覚え書き」なども入ります。その全体をここで紹介する余裕はともありませんが、この機会に、文学研究を志す人もそうでない人も、一人でも多くの人たちにこの全集を読んでもらえれば幸いです。

全十巻に及ぶ全集の編集と校正に追われながら、ぼくは、人間の一生ということをしみじみと考えます。ぼくたちのえがく軌跡がどんなにささやかであろうとも、先達の築いたその先にぼくたちの峰があるのでしよう。

付記 いまかかずらわっている本についての、いささか〈ぼく自身のための広告〉めいた文章になってしまいました。編集子の注文にはずれてしまったことをお詫びし、次の機会に約束を果たしたいと思います。

中岡哲郎著『工場の哲学』

志村賢男

巨大なプラントは今では瀬戸内のありふれた風景になってしまった。そこには果して労働者はいるのだろうか。いるとしたら彼らはいったいどんな仕事をし、またどんなことを考えているのだろうか。誰でも一度ぐらいは、そんな想いにかられたことがあるだろう。コンビナートは、私たちには容易に立入ることの許されない現代の聖域を象徴するかのようだ。だが、現代の社会あるいは人間、労働を理解するためには、科学的な分析の手がそこまで及ばねばならない。

ところで、マルクス経済学による現状分析は戦後も永いこと伝統的な低賃金構造説への固執によって、技術革新の影響を過小評価し、戦後の社会変化を十分把握できなかったという負い目をもつ。私などが産業構造論的な方法によって現状分析の再検討を試

みたのも、いわば伝統的理論の批判を意図してのことである。戦後の技術論の展開の一半も、おそらく同様の経緯のもとにあると思う。

こういう理論状況のもとにおける本書の意図は著者によって「この社会を下から支えている生産の構造の、要素をなしている極微の一点である労働の現場での変化から出発して社会の総体の把握へとつないでゆく方法」（8ページ）と述べられている。そして、この視角は社会の変革の手がかりを「皆いあわせたように」市民的生活と経済の面からとらえようとする傾向に対置されたものでもある。著者は生産の細胞である「工場」に着目し、そこにおける「生産工程の組織化」に分析の鍵を求め、分析の範囲はごく狭く限定されているとはいえ、その射程はきわめて遠方にまで及ぶ。章題をここで紹介して

おこう。Ⅰ序、Ⅱ工場、Ⅲ労働、Ⅳ分業の再編成、Ⅴ事務労働の分析、Ⅵ知的労働の組織化、Ⅶ労務管理の思想、Ⅷ労働と人間、以上である。

さて、そこで分析はいかに展開し、いかなる認識に到達するか。逐一紹介するわけにはいかないから、著者が労務管理のところで述べている結論的命題をあげるにとどめる。

「この本での私の分析は、熟練と名のつくものはそれがどのようなあいまいな性格のものであれ、労働者の人格と不可分であることによって、労働者の財産なのだという考えを軸としている。この労働者自身に属する労働の能力は、装置化の進行した工場では例外なく、Ⅳ章のような形で、プラントの能力を10パーセントくらい左右しうる、しかしその中で個々の寄与はたしかめがたい集団の能力としてあらわれる。そして、品質管理やZDはまさしくこの部分を対象とし、それを経営の秩序の中に管理する技術なのである。」(226ページ)

オートメーション工場の労働というサブタイトルをもつⅣ章が中心部分をなすことが右の引用からも知れるであろう。以下、2・3の読後感を述べることにしよう。

工場、そこにおける生産工程の組織化に考察の出发点をおく、このような分析が社会科学としてどれ程有効なものかは、この着想が方法的にいかに周到に用意されたものであるか、否かにかかわることであって、分析の範囲の広・狭はさして問題とはならない。しかし、この点についての根拠は十分にみいだすことはできない。「工程原理の機械論的性格が……人間の問題とぶつかり合う今日の最も鋭な問題が集中している1つの場所がこの部分である」(257ページ)といった類の直観的指摘があるだけだ。

生産の現場、工場が問題のない場所だとは、おそらく誰も考えはしないであろう。疑問を感ずるのは、むしろ、それ以外の社会科学的アプローチをいっさい拒否するような断定のしかたにある。たとえば終章で「この方法ではトータルなものとしての人間の問題はあつかいきれない」と告白しながら、それは決してその他の研究領域・方法を肯定しているわけではない。「現代の人間の問題の多くは、そのような構造的分析をはみだすところから発生する」とさえ、いうのである。とすると、分析とは社会科学にとっていったい何なのだろう。このような分析の諦

めにつらなるような閉鎖的理論体系は孤立化をまめがれえないし、ここから提起されてくる綱領はしょせん社会的展望を獲得しがたいであろう。

ここいらのところは「あとがき」で、この本は「哲学」というには気はずかしく、さりとて「科学」でもないと軽く体をかわしている。とりわけ「技術的過程」に限定したということで「経済学」との一線を画しているようである。しかし、そのわりには所要所をコストの経済論理とマルクスの言葉によってつないでゆくということを好む人である。そこいらへんが「既成の枠にはまらない」、「マルクスの視点に立った」技術論の試みということなのか。そして、そここのところが世間に受けているらしい。

私がむしろ興味をもったのは、この本がこうして受けているらしい理由の方である。どうやら現場主義といった方がふさわしいような実証とは区別された地点に立って、たとえばオートメ工場においても工程は一般的に信じられているほど固定的ではない(Ⅳ章)との「分析」を示し、……当面のところ私(中岡)にとって関心のあるのは、労働の止揚について談義にふけることではなくて、自動装置化の進行にともなう手労働からの生産過程の精神的力能の分離の問題と格闘することである(139ページ)……とつないでゆく筋運びと節廻しに殆んどかかっているように見受ける。

こうした表現形式が価値をもつものか、どうか、一度、文学者に読んでもらって評をいただいたらどうかと思う。その判断によっては、論壇やジャーナリズムが社会科学や労働運動にとってどういう距離に位置するのか、格好の素材を提供してくれるかも知れない。

講座 農に生きる

“土に生命を”

鈴木達彦

この書は「近代化農政」を農民の原点に立って告発しつつある編集者が、農村近代化に押しながされ、農業生産に対して急速に意慾を失いつつある農民の現状を世にうたえるとともに、農業生産を農民の手にとりもどす方途を明らかにしようとしたものである。

第一章においては、人間はサルに進化したもので、本来、雑食性であり、小腸の長さは身長の数倍もあることから、自然にとれる食物がもっとも適合していることなど、人間を“生物”として、見直すことの重要性についてふれ、工業技術といえども、地域社会を無視すべきではなく、農業技術とタイアップした、地域性に適合したものでなければならぬこと、また、その技術には限界があって、食品であれ、医薬品であれ、肥料であれ、結局は生物資源から出発した技術の全面的な代替ができないことを強調し、これらの技術の進出には大企業のマスコミによることが大きいことを明らかにしている。

第2章では、農業そのものを反自然としてとらえ、人間が本来あるがままの植物を人間の意志にそうように——生産性をあげるように——改良した結果生じた矛盾をといている。植物の奇形化、単作（モノカルチャー）多収による害鳥、病害虫の多発—農業の多用—、人工肥料の多施用—土の悪化—など生態系の破壊があげられ、生物と無生物を同一視しすぎた近代科学の自然観の反省をせまっている。

第3章では、商品をつくる農業——ニワトリやブタのケージ飼育、ハウス園芸の野菜づくり——を告発し、それにかわるころみとして、都市生活者が農村に入りこみ、米・ブタ・ニワトリ・野菜作りをおこなっている「たまご会」の実験と思想がのべられている。

ここにおいては、ブタやニワトリは大企業の提供する配合飼料ではなく、畑で生産される飼料が与えられ、排泄物は農耕地に還元するという自己完結循環方式がとられ、ブタやニワトリ、野菜は土の上で日光下で飼育されている。生産物は都市消費者にとどけられ、生産者—消費者の連帯観が強調されるな

ど、本当の意味の農、畜産物の生産に意慾が感じられる。

第4章においては、伝統農法の創造と継承に関して、山形県庄内地方における伝統農法の例をあげ、農業技術が「ムラ」を核とするコミュニティの場で支えられてきたが、イネづくりが化学肥料を中心とする近代農法にとってかわり、官僚技術が「ムラ」に浸透するにしたがって、「ムラ」が崩壊し、伝統農法がくずれさり、出稼ぎの日銭カセギが追いつきをかけ、イナ作減反・イナ作調整の今日に及んで決定的になったことをあげ、今後の農業の見直しには、土に生きる百姓が名実ともにみなおされ、「ムラ」に依存した農業の変革が、食糧自給という長期的展望にたって、おこなわなければならないとしている。また、野菜は、季節に合った「シュンもの」が、本来のもので、味も品質もよく、コストの安いことから、施設野菜の悪い側面をつくるとともに、施設野菜が「選択的拡大」の農政の優等生として、マス・メディアの対象となりつつ、伝統農法の崩壊に拍車をかける結果になったとしている。

第5・第6章は、今日の現場の農民の切実な悲痛な生のさけびであり、生の声だけに、心うたれる物語りである。第5章は、女一人で25haの水田を維持する、うつろな努力であり、機械にコキツカワレ、あすの展望もない、埼玉の農民の悲しみであり、第6章では、東北新幹線、東北高速道路の建設にとまって、地価をつりあげられ、先祖代々の土地を売って、利息で暮した方がよい、百姓はバカだと苦笑する岩手の農民の話である。戦争中は、米の強制供出で買上げられ、今度は、米をつくるなどはと、やるせない農民の怒りが、農協のおしきせの苗、コンバイン（収穫機械）でかりのこされた粳をひろうひまもない、またひろう気にもなれない、非人間的機械化、“ムラ”特有の右へならえ方式で、人がゆくから、自分も出稼ぎにゆくという、悪い意味の連帯観とともに、切実なひびきをもって読者に訴えている。土からきりはなされた、ケージ飼育のブタやニワトリには、病気を防ぐために、大量の抗生物質を

飼料に加えているという事実から、「土」に生命をふきこむこと、土を中心とした、物質の自然循環が重要であると、現場の農民がむすんでいる。ここでも、生物は自然環境におくことが、もっとも、健康で合理的であることを示しているのである。

第7章は、水田の基盤整備において、あなたまかせの行政技術が、どんなに欠点があることが多いか、具体的事例をあげて、説明し、農民組織の参画のもとに、基盤整備に成功した例があげられている。また、清浄な水資源の確保という意味で、工業用水より、農業用水の重要性を示唆している。

最後に、編集者が、「土」に生命を解題し、問題を提起している。

学部を考えるひとつのデーター

羊たちの午後

学生側企画

代表・村田 格

トンネルを抜けるとそこは明るかったが……ちょっと大きな電球がついているだけで、そこもやはりトンネルだった。期待していたものが用意されてなくて、結局大学は社会に出るまでのトンネルと考へて、大学生活を送っている人も多いのではないだろうか。大学を知らない受験生に与えられている総合科学部の「幻実」を探ろうとした学生たちがいる。彼らの行動は興味本位的であったが、広報委員会も企画化を前提として協力した。学部の情報責任ほかを考える資料にでもなれば幸いである。

失礼します。3年の村田です。昨年度の冬、2年の松沢と学部について話をしているうちに、「受験生はどういう気持ちで総合科学部を受けに来るのか」を知りたくなりました。二人ともそれぞれの期待を持って入学したのですが、それらが<与えられた幻想>でしかなかったと感じていたので、受験生もそうだと可愛想だと思ったのです。総合科学部はあまり知られていないから、その情報は不足している、要項はどこでも良さそうに書くがウチのはとびぬけ

て欺瞞的だ、自分たちでわかっている範囲の正しい情報を伝えたい、と考えました。そこで僕は地理案内、交通案内を兼ねた総合科学部案内の店出しをしようと思いたちました。松沢も賛成し、アンケートもとって調べたいと提案しました。当初僕たちは $\frac{3}{2}$ ~ $\frac{3}{4}$ にやろうとしていたので、受験生心理と新情報による動揺も考えないではなく、当日教育学部の人々が来て、彼もいぶかっていましたが、他に機会もなく、真実を隠しているのはすっかりしません。一部

